

越山若水

2021.7.19

76年前の7月19日、福井空襲で落とされた焼夷弾は当時の福井市人口約10万人に対し1人1本を数えた「福井空襲史」(1978年発行)にある。だがこれはもっ

と多いはずである▼焼夷弾は9466発とされるが、うち3785発は子爆弾48発を束ねた「収束焼夷弾」と呼ばれ、これだけで18万発を超える計算。同書の別の箇所にも「被害者1人に4・5発」との記載もあり、この方が実態に近いだろう▼この膨大な数の焼夷弾はどつやって落とされたか。同書は証言を交えて記している。第1弾は中心部の神明神社付近に落下。次いで市街地の周辺部に次々と落とされ「市民の避難退路が断られた」。その後「次第に中心部へと渦巻き状に、まきちらされた」のである▼同様の記述が複数箇所にもみられるから、確かな話だろう。これでは人々は逃げようがない。米軍側資料は空襲の目的を産業施設の破壊と書くが、証言からは人的被害の拡大を狙っていた事実が浮かび上がる。死者1576人は多くが非戦闘員。915人が女性だった▼1500近くに及ぶ同書は数多くの被害者の声を収める。丹念に読み込んでいくことで、公の資料の欺瞞を覆すような事柄がまだまだ見えてくるかもしれない。同書は前書きで「この書物は稿本(下書き)」「願わくば後世の人々に改訂してほしい」としている。語り継ぐ努力を続けたい。